

学生・教員が共に成長する場を求めて ～「学校ボランティア」の展開に関する中間報告～

本間 利夫

はじめに

本学の教職課程における「学校ボランティア」の取組は、年々多岐にわたり多くの活動成果を上げている⁽¹⁾。

その中心的な推進者である入江直子教授から、2013年度の始めに後述する福井大学教職大学院の取組を模した活動を神奈川大学でも出来ないだろうかと相談を受け、教職課程の非常勤講師であり、中学校勤務の経験もある私にその任に当たるよう依頼された。

ここでは、以後二年余の手探りで実践してきたことを中間報告の形でまとめてみた。

1. 福井大学教職大学院の特色

福井大学教職大学院の特色は、右の図1で見られるように学校拠点協働実践研究プロジェクトにある。拠点校や連携校が抱える課題について大学と学校が協働して取り組むことを教育課程の中心に置いている。

スクールリーダー養成コースの院生（現職教員）は、自分の学校で学校の課題を追究し、そこに教職専門性開発コースの院生（学部進学者）が長期インターシップとして入る。加えて大学教員もチームで学校に入り協働していく。このような学校現場における実習が単位になる。

大学では学校行事等に配慮した時期に集中講座や合同カンファレンス、ラウンドテーブルを行う。

この形式は、今日的課題について学校の生きた教育活動を通して実践的に研究を進められること、現職教員が研究のために学校を離れにくい現実が解消されること等の利点がある。福井大学教職大学院はこのやり方で多くの成果を上げており、文科省も高く評価している。

この「学校拠点の教師教育」の全国的な展開をめざして、福井大学は、全国の12国立・私立大学との連携によるプロジェクト（GP）「グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業の推進」（平成25年度～平成27年度）に取り組んでいる。本学は、単に教職課程をもつ私立大学であるが、このプロジェクトにおける連携機関として、実務家教員（非常勤）の人件費が配分されることとなり、

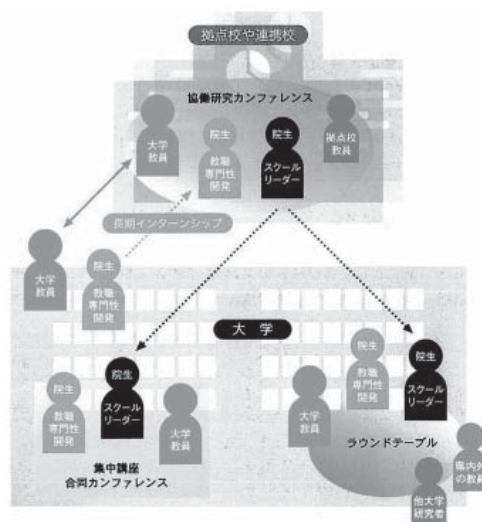


図1（福井大学教職大学院紹介パンフレットより）

前述のように、私はその任に当たることになったのである。

2. 神奈川大学における取組の模索

教職大学院はもとより教員養成の学部もない本学で、福井大から学び何ができるか考えた時、入江教授が、既に地域の学校とのつながりの中で成果を上げている「学校ボランティアにおける学びの展開」を考えられたのは当然であったといえる。

それを受け、私は福井大の取組から「学校ボランティア」の活動に取り入れられそうなことを次のように整理し活動目標としてみた。

目標① 大学教員が学校現場で学校ボランティア学生を指導支援する。

これまで学生の学校での指導は基本的にボランティア受け入れ校にお任せであったが、大学の教員である私が学校に出向きその場で指導に加わる。また、時間があれば管理職や担当者を交えた研究協議を行う。

目標② ①に関連し、両者の間に大学教員が立ち、より教育効果を上げる為の仲立ちをする。

学生と、受け入れ校の教員の思いや願いを双方から聴き取り協議し、活動をより良い方向に導く。

目標③ 学生と受け入れ校の現職教員が共に資質能力を高める機会を図る。

学生と教員双方が共に成長する場を設定し、大学も専門性を生かして協働する。福井大から学ぶこの取組の最大且つ最終的な目標とする。

目標④ 大学内で実施されている、授業「学校ボランティア演習」、ボランティア先の学校との情報交流会、教職課程が開催する関係者との教育研究交流会等を有効活用する。

上記①～③の目標を達成する為に、これらの場を活用し情報発信や情報交換を行う。

3. 活動報告

(1) 2013年度

活動の開始は、福井大学教職大学院との事務上の手続きもあり実質的に10月に入ってからになった⁽²⁾。ボランティア受け入れ校を週1回のペースで訪問することから始めた。2月末まで14校延べ31名の学生と接することが出来た。

1年目の活動の中心は、受け入れ校への挨拶及びこの活動の説明と、目標①の学校現場での学生の指導支援に置いた。

挨拶の中で、多くの学校でボランティア学生の評価が概ね高く大変助かっているとの言葉をいただき、「学校ボランティア」が根付いてきていることが分かった。ただ目標③については今一つイメージがつかめないうで、早期の具体化の必要を感じた。何よりの収穫は、大学の教員が受け入れ校に足を運ぶことで両者の信頼関係や連携の強化に役立つ思いを強くしたことであり、事実、以後回を重ねる毎に現実のものとなっていった。

目標①についての取組

現場での学生指導は、活動状況を目の当たりにし、新たな気づきがあった。以下幾つか列挙してみる。

- ・現場での直接指導で学生の学びが効果的に深まり、その場での課題解決に結びつきやすかった。
- ・学生が大学では経験できない学びを得ていることを改めて実感でき、「学校ボランティア」の有効性を確認できた。
- ・大学の教員が入ることで、学生に良い意味での緊張感と向上心が生まれるのを感じた。
- ・経験の長短にもよるが、「お客さん」的な学生もいて、指示待ちせず、もっと自分から子どもや担当教員の中へ入ることを指導する場面が多くあった。
- ・学生の課題が、学習指導より子どもとの関係づくりや声かけ、児童・生徒理解の難しさに

あることがわかった。

- ・管理職や担当者との研究協議は時間的に取りにくい場合が多かった。それでも、授業後の僅かな時間に行う協議は、担当教員や学生の思いの交換ができ有効であった。
- ・現場での直接指導の延長として、白幡小での全国公開研究発表会、荏田南中での社会科教育研究大会に参加する学生が出てきたことは嬉しい成果であった。

これらの目標①に関して感じたことを目標④の学校ボランティア演習及び学校ボランティア情報交流会の場で発信する機会を持った。

(2) 2014年度

目標①についての取組

受け入れ校14校で学生延べ47名を指導支援できた。2年目にあたり学生が私に自らアドバイスを求める姿勢も見られるようになり、研究協議の時間を設定していただける学校も増加した。

この状況を踏まえ、年度の重点を目標②と③の実現に置くこととした。手立てとして、連携の歴史が古く多数の学生を受け入れていただいている白幡小、栗田谷中、松本中を拠点校と定めた。そこでの成果を全体に広げていく手法を取った。

目標②についての取組

学生からの聴き取りは、実習中と大学での学校ボランティア演習後の時間に行った。

- ・学校作成の振り返りカードが学校全体のものとなっていないと教員によって扱いが違い戸惑う。
- ・控室や個別指導室の冷暖房が不完全で学習環境が悪い。
- ・個別指導の教材の準備が不十分である。
- ・自分の教科だけでなく、同じクラスの他の教科を見たり、また、個別支援学級を見たりすることはできないか。

- ・子ども理解のための情報をもう少し提供してもらえないか 等

いずれの課題も私が学校側に伝え、解決ができた。しかし本来は個別に学生が学校と話し合っ解決を図ることであり、学生のそういった力の不足を感じた。

学校側の聴き取りは拠点校に限らず学校訪問時に行った。

- ・学生からの欠席や遅刻の連絡が遅れたり無いことが予定をたてるのに一番困る。
- ・もっと遠慮しないで質問して欲しい。忙しく答える余裕のない時はその旨伝えるから。
- ・指示を待たなくても、この場面では何をすべきか、誰に寄り添うべきか判断して欲しい。
- ・私たちと一緒に子どもの成長を喜び合う姿勢に期待する。等

これらについては当該学生に個別に指導したり、学校ボランティア演習の場で発信した。熱心に指導していただいている学校、担当者ほど要求も高かった。

目標③についての取組

学生に関わることを通して、現職教員が、意識の有無に係らず、教員としての資質能力の向上につながる機会になっていることはどの管理職も認めるところである。

一步進んで、意図的にねらいを持って、学生と現職教員双方が資質能力を高め合い、共に成長できる場を設定する。その第一弾として栗田谷中の協力で「若手現職教員と何でも語ろう会」を実施することができた。これについてはこの報告のメインなので別項を起こして詳述する。

受け入れ校の訪問が回を重ねると、管理職からその学校に勤務する本学の卒業生教員を紹介され指導を依頼されることがあった。4校4名に対し指導支援する機会を得た。これも目標③に繋がると捉えている。

目標④についての取組

学校ボランティア演習に5回参加し学校現場での指導経験をもとに助言を行った。また、学校ボランティア情報交流会、教育研究交流会に

参加して関係者と交流し活動の深まりを図った。

(3) 2015年度

引き続き週1回ペースで学校に入っの指導を継続している。目標③に関する企画を後期に2回程度行う予定である。

7月に大学で開催された学校ボランティア情報交流会の席で、後述する栗田谷中や白幡小の取組を各学校に紹介した。どちらも学生と現職教員が共に成長する場を求めた実践である。

4. 「若手現職教員と何でも語ろう会」

学校ボランティア拠点校に通う学生に企画の趣旨を話し、どんな内容がよいか考えさせてみた。その中で現職の教員と気楽にじっくり話す機会が欲しいとの意見が多かった。そのことを拠点校である栗田谷中の千田校長に相談したところ、今、学校現場では若手教員が増加しており、その育成が大きな課題となっているということであった。学生の要求を満しながら、同時に若手教員の資質能力の向上を図る機会を企画、実施してみることで一致した。その趣旨で企画、実施したのがこの会である。

日時 2014年11月17日(月)
18時20分～20時
場所 横浜市立栗田谷中学校
会議室 保健相談室
参加者 栗田谷中若手教員4名(経験3年以内)
校長 教務主任(学生窓口担当)
大学教員1名(本間)
学生20名(栗田谷中に通う学生がボランティア学生全体に呼びかけた)

(1) 当日の運営

全体会 ①挨拶と会の趣旨説明 本間
②学生に期待すること 教務主任
③4人の若手教員の自己紹介

④進め方の説明とグループ分け
分科会 司会は2グループとも学生
①学生自己紹介
②教職の現状と思い 若手教員
③質疑・応答 歓談
④感想 お礼
全体会 ①振り返り用紙の記入
②今日のまとめ 校長

(2) 会の様子と成果

なるべく気軽に本音で話せるように私と校長は分科会には時々顔を出す程度にした。二つの会場からは大きな笑い声も聞こえ楽しそうで良い雰囲気が伝わってきた。全体会では教務主任から「教員と共に子どもの成長を喜び合いましょう」「君たちと立場を同じくして働ける日を待っています」など熱いメッセージを送られ学生が感激していた。会の雰囲気がよかったのか、終了後何人かの学生と教員が居酒屋で続きを行ったことを後から知ることになった。

私なりに成果をまとめてみる。

<学生にとって>

少し上の先輩と気楽に話せたことにより、学校ボランティアや教職について考えていた疑問や課題解決の場となり、教職に向けての意欲を高める機会となった。

<若手現職教員にとって>

学生に自分の思いや経験を語ることにより、教員としての自覚が高まり自信を持つことができたようである。改めて教職に就いてからの自分を振り返る機会ともなり、今後の取組に繋がる効果もあった。日頃職場では先輩職員に何かと指導される立場から、少し先輩面をして振る舞う中での効果であろう。予想以上の成果として、後日千田校長から、参加した教員の一人が自分の持つ課題を改善しようとする態度が出てきて嬉しく思っているとの報告を受けた。

全体として、両者の学び合いを通して共に成長していこうとする姿勢が感じられた。初めての試みとしては考えていた以上の成果が上がっ

たと評価したい。

(3) 校長からの評価

千田校長から成果と課題について以下の文章が寄せられた。

＜学生にとって＞

学生たちは近い将来自分たちも経験するかもしれない出来事を聴くことができる機会であり、真剣に教員の話に聴き入っていた。年齢の近い人たちの生の声はストレートに学生に響くようである。ごちないながらも一生懸命にがんばる少し先輩の話は、現実的で理解しやすいようである。学生は遠慮なく疑問点を若手教員にぶつけていた。ベテラン教員相手だとうはいかないであろう。

＜若手教員にとって＞

若手教員は自分たちの思いや経験が学生たちに通じると、教員としての自覚が強化され、自信を持つことが出来るようになる。人は語るうちに、気になっていたことや課題が整理され、今後の取組の糸口が見えてくるようであった。学生たちから少し上の話しやすい先輩として見てもらえるだけでも自信になったようである。若者だけの話しやすい雰囲気の中で自己を解放することにより、日頃考えることも出来なかったことも冷静に考える機会にもなったと思う。

課題としては、学校は子どもがいる時間は空き時間がまったくないのが現状である。学生も授業のことを考えると今回のように遅い時間の開始の方がよいのか、双方の参加体制との関係で考えていかねばならぬ課題である。

(4) 振り返り用紙から（抜粋）

＜若手教員＞

- ・自分のこれまでの経験や思いをありのままに話したので、少しでも共感できる部分や参考になることがあれば幸いです。学生のみなさんの熱い思いを聞いてこちらも初心を思い出して頑張ろうと思いました。お互いその熱い思いを忘れないようにしましょう。

- ・学生さんに質問され、久々に面接を受けているようで新鮮で楽しい時間でした。有意義な会を催していただき感謝しています。
- ・ATとして教員としてどうあるべきかの根本的な質問を受け、私も初心に帰ることができました。
- ・学生と話をする中で、自分の教育活動を振り返ることが出来ました。また、同僚の先生による学生へのアドバイスは私へのメッセージでもであると受け取りました。

＜学生＞

- ・「子どもと共に成長できる」という言葉を聞いて教員になる意欲が強くなりました。継続して見ていくことで子どもの成長に気づき喜びになることも分かりました
- ・先生方がどんな思いで生徒たちを教えているかよくわかりました。難しいことを考えているよりも生徒にありのままにぶつかることが何よりも大切だと痛感しました。
- ・普段の活動ではゆっくり聞く機会がないのでためになりました。分からないことをもっと担当の先生に聞かなければと考えました。
- ・自分がどうしても聞きたかったことが聞けて良かったです。今回の話を踏まえて、生徒や先生方とよりよい関係がつけられるようコミュニケーションをとっていきます。
- ・先生方の教育観、現在の教育の実態、やりがいなどを聞く機会となりました。生徒に対する一生懸命な姿や自ら学ぼうとする姿勢が求められていることに気づけました。
- ・自分の悩みを若い先生方と共有することが出来ました。他の学生の思いや考えを聞いたのも収穫でした。
- ・採用されるまでの道のりが多様であった先生方の話を聞いて励みになりました。このような場があると教職に対する気持ちが少し楽になった気がします。
- ・先生も一人の人間であるということが分かり、人間としての自分のポリシーをもつことが大切だと思いました。

- ・気になる生徒への対応の話は参考になりました。
- ・採用試験に失敗し不安に感じていた中で改めて教員になりたいと思え、モチベーションにつなげることが出来ました。
- ・今度はベテランの先生とお話しして経験談を聞いてみたいとも思いました。
- ・まずは名前を覚えること、覚えてもらうことが大事であり実践していこうと思います。
- ・教員になりたい思いを再認識することが出来ました。来年は教員になり自分が学生に伝えられるよう努力していきます。

5. 今後に向けて～課題を踏まえて～

栗田谷中での実践を踏まえて、課題も含めて今後を展望してみたい。

(1) 実現出来そうなこと

学校現場での若い教師の増加にともなう資質能力の育成はどの学校でも重要な課題である。同時に教育の場に立ったなら即戦力と期待されるであろう学生にとっても自分の問題である。「何でも語ろう会」は他校でも広げていきたい。若い教員に対し各学校でメンターチームが設けられ研修が行われている。その場に学生や私も参加させてもらうのも良いかもしれない。刺激し合う場となろう。

各学校の課題に即したテーマでの研修に大学教員が専門性をいかして協働することができないかと考える。例えば、発達障害の子どもたちの接し方について悩んでいる教員と支援に入っている学生、それを専門にしている大学教員が共に学び合う場を設定する。同様に、教科指導課題対応に教科教育法研究、運動部の指導課題対応にスポーツの科学的指導法研究、リーダー育成対応に教員免許状更新講習ミニ版による研究なども実現は不可能でないかと考える。関係者の協力、連携を得られるかが課題となるが。

(2) 「学校ボランティア」を通して学校が変わる

各学校が、「学校ボランティア」に来ている学生の学びをより良いものにしようと試みる中で、学校自体の変化も生まれる。「何でも語ろう会」の実践がそれであり、次に紹介するのも一つの例である。

拠点校の一つである白幡小では土曜塾を開催しており本学の学生も支援に入っている。今年度から、学生が支援の中で気づいたこと、分からないことを用紙に記して提出。その用紙が必ず担任に回りコメントを書いて返されるシステムが確立された。担任は用紙により子どもの状況を知ると同時に、コメントを書くことにより自分自身のスキルアップを図ることになる。ちなみにこのシステムの提案者は本学の卒業生教員である。

このような小さな実践でも共有していけば、各学校に合わせたものが創造できないかと期待する。

もう少し広げて展望すれば、学校は、昨今「特色ある学校づくり」「開かれた学校づくり」が求められている。その場合、少なくとも神奈川区内の学校は、本学を地域にある教材と捉えた時、様々な連携が生まれると考える⁽³⁾。

学校側からの大学への積極的な相談や提案を望みたい。

(3) 「学校ボランティア」から大学が得るものと役割

大学が、「学校ボランティア」を発展、深化させようとする取組は、今回の例を挙げるまでもなく、第一に学生の学びをより良いものにし学生の成長をもたらす。

同時に、今回の実践を通して、「学校ボランティア」活動は、大学が地域に貢献することにつながると実感した。大学の努力が、地域の学校や教員に、そして子どもたちに何らかの光をあてることになるかもしれない。その意味で、神大の教職課程が「学校ボランティア」を進めてきた中で展開している「神大ユースサポート

プロジェクト」⁽¹⁾は高く評価されよう。

そして、大学の教員も、地域の学校と学生をつなぎ協働することで多くの学びを得るであろうことを、私自身、今回の取組で確信できた。

おわりに

この活動は始まったばかりで実績もまだ不十分で課題も多い。それでも徐々にではあるが学校関係者の理解・協力は進んで成果も上がってきている。大学と学校が「学校ボランティア」

をより実り多いものにしようとする努力が、双方にとってプラスをもたらす。福井大方式はそのヒントの一つである。

「学校拠点の教師教育」の全国的な展開をめざす福井大学教職大学院のプロジェクトがいつまで続くのか定かでないが、「学校ボランティア」を通して「学生と教員が共に成長する場」を継続、発展させる基盤は造っておきたいと考えている。

中間報告をすることにより皆さまのご批判やご意見をいただき更なる努力をしていきたい。



<若手現職教員と何でも語ろう会分科会風景>

【注】

- (1) 入江直子『学校ボランティア』10年の歩み』
『神奈川大学 心理・教育論集』第35号
(2014年3月)に詳しい。
- (2) 活動する時の筆者の身分は給与の関係もあり福井大学教職大学院の非常勤講師でもある。年1～2回、大学院開催のラウンドテーブルに参加している。
- (3) 筆者は松本中学校長時代(2004～2006年度)神大との中・大連携事業を推進した。学校ボランティア、部活指導、大学非常勤講師への中学教員派遣、中学講演会への大学教員講師依頼、大学祭への参加・協力、水泳部の神大プール借用、研究大会への学生参加と運営協力等さまざまな取組が展開できた。

その一つである「総合的な学習の時間」におけるキャンパスツアー等の取組については、河上婦志子・鈴木浩『生徒の学び・学生の学び』—中大連携の試み—『神奈川大学心理・教育論集』第26号(2007年3月)に詳しい。

中・大連携事業の取組は2005年から「パイオニアスクールよこはま」(提案公募型改革モデル校)に採用された。